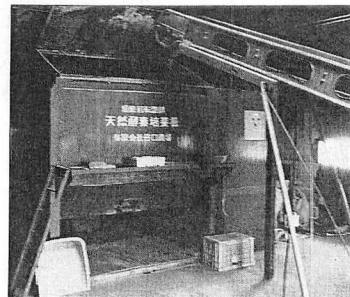


連載・農と食の現場で



有機質肥料の培養機(旭川の谷口農場で)と
12haの特栽培米を作る谷口さん。

稲作に新風を吹きこむ 「特別栽培米」の試み

滝川 康治

ルボライター

6年前に始まつた「特別栽培米」の作付けが、年を追つて増えている。消費者の関心も高まるばかり。いち早く取り組んだ事例をみながら、今後の課題を考える。

土に貯蓄し面積増やす

歓声を上げていた。

大雪山系から水を集めて形成された、道内有数の米どころ・上川盆地。旭川市東旭川町にある有限会社・谷口農場(谷口威裕代表)は、忠別川にほど近い肥沃な水田地帯にある。わたしが訪れたのは、ちょうど「ファームまつり」の日で、スタッフたちがミニパレードで、スタッフたちがミニパレードで、

まだ新しい農場の事務所は、パソコンなどが並んで、町のオフィスを思わせる。応接用のソファーのそばにあるミニチュアの米俵から、稲作に賭ける情熱が伝わってくる。

同農場のスタッフは10人。水田約32ヘクタールと野菜類3ヘクタールをつくり、34頭の育成牛を飼う複合農業を

営む。稻の苗を育てたあと、ハウス栽培のトマトでジュースを製造する加工部門もある。気鋭の農場である。「米を作っているのに、直接売つてもうえないのか?」

員からよく言っていた。新聞記事で特別栽培米(以下、特栽培と略)の制度が始まったことを知り、88年、さつそく取り組むことにしたという。

その特栽培とは、有機物の投入によるとのグループの取引量は年間おおむね10トン以内――との上限があり、価

格は双方が話し合つて決める。

同農場では、米ぬかや大豆粕、骨粉、貝化石などを混ぜ合わせて発酵させた有機質肥料と微生物資材を使つた独自の農法が、栽培の基本にある。

個人では最大規模の12ヘクタールの水田で特栽培米(うち2ヘクタールが無農薬田)を作付けする谷口さん(44)は、3代続いた水田農家の長男坊。高校を出てすぐ、「あまり好きではなかつた」家業を引き継いだとか。微生物農法は、10年ほど前に導入した。

「農業者の基本は、土に貯蓄すること。人間が手をかけてやるときちんとした作物ができる、と感じていた。昔から牛を飼つて、糞わらを堆肥にして土に貯蓄すること。

いたんで、自然にこの農法を取り入れられたんです」と、自前の有機農業の流れの上に特栽培米があつたことを強調する。

130人ほどから始まつた特栽培米の出荷は、今年は10000人ほどの契約になり、10000円ほど高い。毎年、消費者会員の農場視察をかねて、収穫祭やビールパーティーなどの催しをやつており、つながりを深めている。

札幌市白石区の小玉百代さんは、同農場の特栽培米を購入しつづけて4年ほどになる。コンブの健康食品を通じて知り合つた旭川の人から農場の特栽培米を勧められて、購入が始まつたとか。この健康食品を購入している人や友人に、特栽培米の輪を広げてきた。

「谷口さんの米には、甘味と粘りがあり、ご飯本来の香りと味がします。今年は農場を見学に行つてみたい。購入する人を増やして、ずっと食べづけたいですね」と、息の長いつきあいをしようとしていた。

谷口さんは、特栽培米を始めた年に、市内や旭川近郊の仲間と「北海道クリーン農業研究会」(会員28人)を結成し

特栽培米制度は、農水省が米の価格を決める従来のシステムを、国自身が軌道修正したことを意味している。士別市多寄町で6世帯が力を合わせて、農畜産物の生産から加工、販売までを手がけている農事組合法人・士別農園も、かねてから食管制度のあり方には疑問を抱いていたので、いち早く



▲無農薬田の除草は手作業なので
人の確保が大変(士別農園で)

「北海道クリーン農業研究会」
統一ブランド「雪の舞」

共同経営の強み生かす

特栽培米制度は、農水省が米の価格を決める従来のシステムを、国自身が軌道修正したことを意味している。士別市多寄町で6世帯が力を合わせて、農畜産物の生産から加工、販売までを手がけている農事組合法人・士別農園も、かねてから食管制度のあり方には疑問を抱いていたので、いち早く

